

第 7 章 総 合 評 価



総合評価（振り返りとこれから）

アザメの瀬の整備に関しては2つの目標（1.河川の氾濫原的湿地の再生、2.人と生物のふれあいの再生）を立て、これらを達成するため「Adaptive Management（順応的管理）」と「徹底した住民参画」にこだわりをもって進めてきた。行政側としてもほぼ初めての試みでもありリファレンスが無くデータや知見が不足しすべてにおいて手探りで進めるなか、整備にあたっては地域の方々や大学等の研究者の協力さらに施工業者の創意工夫など多くの関係者による協働により完成に至った。

ここでは、2つの目標の達成状況ならびに振り返りと今後の維持管理、利活用などのあり方について以下のとおり述べる。

1. 河川の氾濫原的湿地の再生

河川の氾濫原的湿地として「アザメの瀬」を検証するために、氾濫原的湿地としての機能を把握することが必要であり整備により期待される効果を想定し、求められる5つの機能を設定した。各機能の検証結果は以下のとおりである。

魚類の産卵場・生育の場としての機能

機能：松浦川及びアザメの瀬に生息する魚類にとっての良好な産卵場として利用されること。

現状：アザメの瀬で確認されている多様な魚類のうち、19種はアザメの瀬に存在する水草、二枚貝、泥底などを産卵環境とする種であり、アザメの瀬がこれら多くの種にとっての産卵場として利用されている可能性がある。また、そのうちの5種の魚類についてはアザメの瀬で実際に産卵していることが確認されており、経年的に多種にわたる魚類の仔稚魚も確認されていることから、「魚類の産卵場としての機能」が発揮されていると判断される。ただし、下池についてはヒシの優占により貧酸素化の懸念がある。

出水時における魚類の避難場としての機能

機能：松浦川の出水時に、アザメの瀬が魚類の避難場となること。

現状：アザメの瀬を主な生息環境としない種のなかには、出水前に確認されていなかったが出水後に確認されるようになった種がみられ、これらの種については出水時にアザメの瀬を避難場として利用しているものと考えられる。また、定置網調査で出水時に魚類の侵入が確認されており、「出水時における魚類の避難場としての機能」が発揮されていると判断される。

湿性地の植物が魚類や底生動物の生息基盤としての機能

機能：アザメの瀬に湿性植物が生育することで、植物帯を生息場とする魚類や底生動物の生息基盤となること。

現状：水位の安定している下池では水際や水域の植生が繁茂しており、魚類調査結果では植生に依存するフナ類やメダカが多く確認されていることから、これら湿性地の植物を生息場とする生物の良好な生息場となっていると考えられ、「湿性地の植物の魚類の生息基盤としての機能」が発揮されていると判断される。

湿性植物の良好な生育場としての機能

機能：流水環境である松浦川本川にはみられない、湿性植物の良好な生育場となること。

現状：湿生植物群落の面積は安定してきており、松浦川本川で確認されていない湿性植物が、アザメの瀬で多く確認されていることから「湿性植物の良好な生育場」としての機能が発揮されていると判断される。

多様な種が生育・生息する豊かな生態系の場としての機能

機能：アザメの瀬が様々な環境を有することで、多様な種が生育・生息できる場となること。

現状：モニタリング結果より、多様な生物の生育場として利用されていることが明らかとなった。また、ヤナギの生長に伴い、アザメの瀬の環境が多様化しており、樹林性の鳥類が増加している傾向がみられることから、「多様な種が生育・生息する豊かな生態系の場としての機能」が発揮されていると判断される。一方で、外来種も確認されており、種ごとに対応策を考えていく必要がある。

2. 人と生物のふれあいの再生

住民組織の発足

アザメの瀬自然再生事業をバックアップするための自治組織であるアザメの会が、事業着手直後の平成14年に発足し、平成17年にNPO法人アザメの会となった。アザメの会は地元の佐里下地区、佐里上地区、杉野地区を中心としたグループで組織された。

子どもを軸とした自然とのふれあい

アザメの会では、平成15年に地元の小学校の生徒を対象にアザメの瀬の現地見学会を開催し、子供たちとの交流が始まった。その後も継続的に、環境学習や自然環境教室を開催し、松浦川での自然体験や田んぼの楽校で採れた米や、子供達が採った地魚を使った食育など通じて子供たちとの交流を図っている。また、伝統行事であるイダ嵐や堤返しの体験を行うことで、人と自然がふれあう伝統行事の継承も実現している。

これら各種イベントには、子供たちの母親や婦人会の方々、大学生も加わっており、人と人とのふれあいも活発である。また、世代間のふれあいや、行政と住民、学識者と住民など人と人とのつながりも出来てきた。

住民組織の活性化

活動範囲は地域内に留まらず、九州川のワークショップや全国川の日ワークショップなど全国的なイベントにも参加し、アザメの瀬における人と生物のふれあいについて発表を行っている。アザメの会では、全国の様々な団体の熱心な活動に刺激を受けたというが、同じようにアザメの会の活動が他地域の団体の励みになり、参考になり地域活動にとって大きな影響を与えることが出来たのではないかと考えられる。

今後への期待

アザメの瀬における人と生物のふれあいは NPO 法人アザメの会が中心となって実現してきた。アザメの会の発足により、地域と一体感が高まり、子供と自然の関わり、年長者と子供の関わりなど、人と自然、人と人との関わりが再生されてきたといえる。当初の目標として設定した人と生物のふれあいの再生は実現しているが、予想した以上に川の自然再生は魅力に富み、地域に貢献するのではないかと今後も期待をしている。

3. 振り返りとこれから

事業者として目指してきた、アザメの瀬自然再生事業（以下、当事業という。）の2つの目標は、前述のとおり概ね達成できたと考えている。

先にも述べたとおり、リファレンスが無くデータや知見が不足しすべてにおいて手探りで進めるなか、整備にあたっては地域の方々や大学等の研究者の協力さらに施工業者の創意工夫など多くの関係者による協働と様々なプロセスを経て完成に至った。そのプロセスの中で派生的に生じた「対話の重要性の再認識」など、その他の効果について以下のとおり述べる。

対話の重要性の再認識

事業の推進についてはパブリックコメントや対話による事業への反映が重要と言われて久しいが、アザメの瀬では、計画段階から徹底した住民参画の手法をとった。目標達成のため住民と事業者が事業進捗についての対話と検討過程を共有することで、住民の方に主体性を持って事業に携わって頂くことが出来たこと、さらに行政側においては若手職員が中心となることで事業を進める上でのモチベーションになった。以上のことから対話の重要性を再認識したところである。

次代を担う子供たちに向けて

アザメの瀬の利用に関しては地域住民や子どもたちの“川を大事にする意識の醸成”という点でも寄与しているのではないかと考えている。

これは、平成 17 年度から実施している、「田んぼの楽校」や平成 20 年度から実施している「夏休み環境学習」などが、近隣児童はもとより、流域外の児童、またその父兄、地域をも巻き込んで継続的に実施されている点からも評価できると考えている。今後も、川をより一層身近に感じてもらえるような利活用を期待している。

見えてきた課題と今後について

住民が主体となり、関係機関と連携して進めてきた事業であるが、事業着手から長期におよぶ建設期間を終え節目を迎えたこと、参加メンバーの固定化やイベントへの参加者数の減少に伴う取り組み意欲の低下やメンバーの高齢化などの課題も浮き彫りとなったことから持続可能な利活用のあり方の再考が必要である。

また、完成後の維持管理については地域の住民が主体となって実施して頂いているが、建設にあたっては極力コンクリートを使用せず、自然素材を利用するなど建設当時の思いが強かった分、維持管理面で苦慮している箇所も存在している。さらにヤナギなどの木本類の繁茂が近年、顕著であり、そのまま放置し植生の遷移を促す方が良いのか、適時、伐採することで人為的に管理する方が良いのか、課題が残る。

さらに洪水時において、「氾濫」させるということは、洪水流の一部を一時的に貯留させることであり、自然再生事業の効果として、治水からどの程度の効果があるかを評価する必要がある。

他事業で同様の自然再生を行う機会があれば、設定した2つの目標（1.河川の氾濫原的湿地の再生、2.人と生物のふれあいの再生）の他に「持続可能」をキーワードに事業完成後の利活用・容易な維持管理といった観点に加え、治水での有効性の観点といった切り口で議論して頂きたい。